

桃岩物語

海に利尻富士がうつるほどおだやかな秋の日、礼文島のシヤクニン・コタン(村)では、大人たちがいそがしうに海へ出て漁をし、子供たちはいつものように山でブドウやコクワをとって遊んでいました。

元気のよいジャムニ・ポリル・ピレアの兄弟は、今日も両手にかかえ切れないほどの山ブドウをもって、丘で畑仕事をしているソニア姉さんのところまで帰ってきました。

先についた弟のポリルが、ふと沖を見ると今まで見たこともないたくさんの舟が、利尻の方からこちらへ向かってきます。

「ねえ、ねえ、あの舟なあに？」という声に、みんなはポリルの指さす方を見ました。

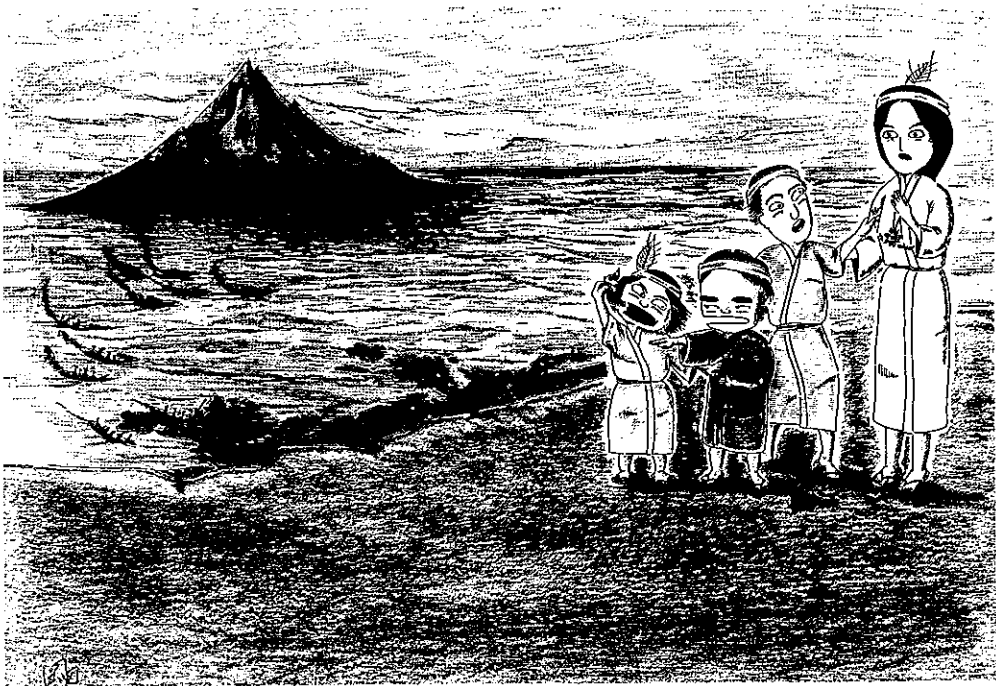
舟には、利尻島で、村むらを荒らしまわった暴れ者一味、百人ほどが乗っていました。

暴れ者たちは、利尻と礼文の二つの島を自分たちのものにしていました。

舟はみるみるうちに岸に近づいてきました。

コタンの人たちは見慣れない者たちの上陸に、仕事の手を止め、あつけにとられていると、暴れ者たちは、隠していた武器で、あつという間に襲いかかり、みんなをしばり上げてしまいました。

この様子を、丘の上から見ていた四人の兄弟は、暴れものの数人がこちらに向かってくるのに気づき、あわてて草の蔭に隠れました。



「どうしよう？」と、いまにも泣き出しそうな声でふるえているポリルト
ピレアを抱きしめながら、ソニアはジャムニに、島で一番強いカフカイ・コ
タンのワカインのところへ行くように言いました。

「姉さんは？」

「私は、あの人たちの注意をひいておくから。」

その間にポリルトとピレアを連れて逃げなさい。」

ジャムニは、「ワカインは姉さんの恋人だから、きっと助けてくれる」と、思いました。

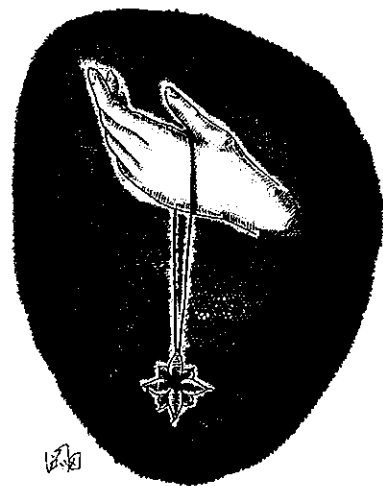
「よし、ポリルト。カフカイまで歩くんた。ピ

レアは、俺におぶされ。」

ジャムニの背中で泣いているピレアに、

「がんばるのよ！この首飾りが、きっとあなたたちを守ってくれるわ。」

と、ソニアは星の形をしたお守りをはずして、ピレアの首にかけました。
三人の姿が見えなくなってから、ソニアは草蔭から飛び出し、弟たちと反



対の方向にかけだしました。

カフカイ・コタンのワカインの家では、大きな魚を釣った弟アツシの自慢

話を聞きながら、楽しい食事をとつ

ていました。

突然、ワカインが、「シー」と、

指を口に当てました。

入り口の所で、ガタンという音がしたのです。

ワカインは、そばにあった棒を手

にして、「だれた」と、叫びました

が、何も返事が返ってきません。

注意深く外へ出ていくと、そこに

は三人の子供たちが倒れていました。



アッシが、

「ジャクニンのジャムニじゃないか。」

と、おどろきの声を上げました。

ジャムニは、ピレアの手をしっかりと握ったまま、口もきけないほど疲れ果てていました。

横に倒れていたポリルが、よわよわしく

「た・す・け・て・・・・。」

と言いました。

水と食べ物を与えられて、いくぶん元気をとりもどした三人は、昼間ジャクニンで起きた様子をワカインに話し、コタンの人たちを助けてくれるようにたのみました。

話を聞いたワカインは、すぐにカフカイの男たちを集め、戦いの準備をはじめました。

やがて、夜が明けるころ、ワカインはジャムニを呼んで、

「いいか、われわれはこれから暴れ者たちを討ちに行くが、何も心配することはない。必ず、みんなを助けてくるからな！」

と励ましました。

東の海に太陽が昇りかけるとともに、ワカインたちは、山づたいに暴れ者のいるジャクニン・コタンに向かいました。

残されたアッシとジャムニも相談をして、こっそり小船で出かけることにしました。

話を聞いていたポリルとピレアも、

「いっしょに行く。」

と、言いました。

「危ないから。」

と、話して二人だけで舟を出しました。

沖に出てしばらくしてから、アッシは前のほうにあるムシロが動くのに気



がつきました。

はがしてみると、そこには残してきたはずのポリルとピレアがいました。

「あれほどついてきてはダメだと言っただのに。」

とジャムニは吐りました。

「もう戻るわけにはいかないし、しかたないよ。」とアッシは言い、四人で行くことにしました。

ジャムニたちがシャクニンの近くに着いたとき、暴れものたちは、しぼり上げたシャクニン・コタンの人たちと見張りを残して、次の攻撃目標のカフカイに向かっていました。

「見張りは二人しかいないぞ。穴を掘ってあいつをおびき出し、落してしまおう。」

とアッシが言うのと、

「そうだ、落とし穴だ。」

と、ジャムニが応えました。

二人は、くぼ地にある穴を一生懸命深く掘り、ポリルとピレアがササの葉を集め、その上にかぶせます。

「いいかポリル、あいつらを落とし穴の方におびき出すんだ。」

すばしっこいポリルは、道ばたの石を見張りに向かって投げつけました。

ピューツ、ゴツツン!

「いてえー。何だあの小僧は!」

「つかまえろ!」

ポリルは落とし穴に向かって一目散にかけ出します。ポリルを追いかけてき



た見張りの一人は、まんまと穴に落ちていきました。もう一人は、あと少しでポリルをつかまえようとした時にジャムニとアツシの引いた縄に足をとられ、いきおい余って崖から落ちてしまいました。

ジャムニたちは、つかまっていたシャクニン・コタンの

みんなの縄を解きながら、
「アツシの兄さんたちが、暴れ者たちをやっつけてくれるよ。」
と、元気よく言いました。
ポリルが、ソニアのいないのに気がつき、

「姉さんは、どこにいるの?」と、聞くと、
「ソニアは連れていかれた。さあ、われわれもかけつけて戦おう。」と、叫びながら、シャクニンアイヌの男たちも山へ向かいました。

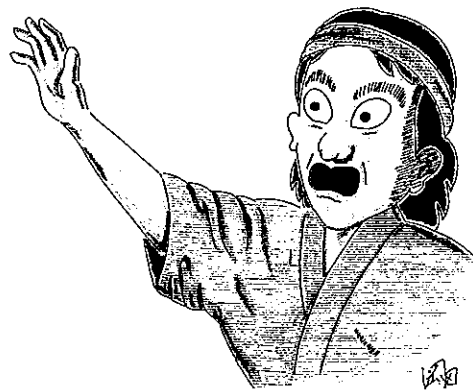
そのころ、桃岩の近くの山では、ワカインたちカフカイアイヌと暴れものたちが、激しい戦いをしていました。どちらも一歩も後には引きません。やがて、暴れものの一味の背後から「うおー!」という声が上がりました。捕らわれていたはずのシャクニン・コタンの人たちでした。

暴れ者の一味は、はさみうちにあい、ジリジリと下がりはじめ、桃岩の頂上にたてこもりました。桃岩は桃の形をした大きな岩で、その頂上に行くにはせまい道を通るしかありません。



はじめました。

「このままでは暴れ者の言うなりに



なって、ワカインたちが負けるかもしれない。私さえいなければ攻めることができるのに・・・」
 そう思うと、ソニアの目に涙があふれてきました。



の娘が引き出されました。

「撃つなら撃つてみる。その前にこの娘も道づれだぞ！」

それは人質として捕らわれていたソニアでした。

「みんな、私にかまわず撃つて。この島を守って。」

と、ソニアは叫びました。

しかし、ソニアを見たワカインたちは、矢を射ることができませんでした。攻めることもできずに両者がにらみ合っているなか、太陽が西の海に沈み

「恐れることはない。ここは先祖の時代から長いあいだ守りつづけてきた我々の島ではないか。」

ワカインの一言に勇気づけられ、暴れ者が投げる石や槍をものともせず、一気に攻め込もうとした時です。
 頂上にたてこもる一味の中から、一人

「ワカイン、撃つて、お願い。」
泣きながらそう叫ぶと、ソニアは暴れ者の手を振りほどき、断崖絶壁から身をおどらせました。

「ソニアア〜・・・。」

ワカインの声がむなしく山やまにこだまし、夕陽で赤く染まった海に、ソニアの身につけていた羽飾りが、ひらひらと舞い落ちていくのを、敵も見方もぼう然と眺めていました。

人質を失った暴れ者の一味は、ワカインたちに降伏し、もう二度と礼尻、礼文を攻めないことを約束したので、命を助けられ、島を引き上げていきました。

暴れ者が去ったあと、ソニアを失った悲しみが消えぬまま、ワカインとジャムニたちは、ピレアがソニアからもらった星の形をした首飾りを、桃岩の見える丘に埋めました。

そしてコタンに、子供たちが、はしやぎまわって遊ぶ、平和な日々が戻っ

てきました。

次の年、首飾りを埋めた所には、いままで見ることのない白い星の形をした花が咲きました。

その白い花は、「うすゆき草」と呼ばれ、美しく可憐だったソニアを思い出させるように、今も桃岩の周りにたくさん

の高山植物とともに咲いています。

また、ソニアが流した涙は、白い「メノウ」の小石となって元地の浜辺に打ち寄せられるようになりました。

